

# 大阪大学未来戦略機構シンポジウムを東京で開催

## 第八部門・光量子科学研究部門

### 「Opt Osaka 2014 in Tokyo—大阪大学の光科学 100—」

3月6日(木)、東京大手町サンケイプラザで、大阪大学未来戦略機構シンポジウム「Opt Osaka 2014 in Tokyo—大阪大学の光科学 100—」を開催しました。

当日は、約500名の参加があり、「光科学における様々な連携研究」と題して、未来戦略機構第八部門(光量子科学研究部門) 児玉了祐部門長、フォトニクスセンター河田聡教授、レーザーエネルギー学研究センター疇地宏センター長が講演し、100を超える研究グループによる盛大なポスターセッションが行われました。

会場は、大阪大学の11部局2組織の光科学に関する研究成果ポスター 100枚以上が立ち並び、レーザーを用いた基礎科学から医療への応用研究まで幅広く意見交換する研究者たちの熱気に包まれました。

## 第六部門・創薬基盤科学研究部門

### 「アカデミア基盤研究から未来創薬へ」

3月27日(木)、学士会館(東京)で、大阪大学未来戦略機構シンポジウム「アカデミア基盤研究から未来創薬へ」を開催しました。

このシンポジウムは、未来戦略機構第六部門(創薬基盤科学研究部門)が主催し、大阪大学の創薬研究への取り組みと難病克服に向けた技術開発などを紹介したものです。

当日は、150名を超える参加者があり、「ウイルスに学ぶ創薬研究～基礎から臨床へ～」と題して、医学系研究科の金田安史研究科長から特別講演がありました。また、「難病治療に向けた探索的創薬研究」をテーマに、医学系研究科の金井好克教授、山下俊英教授、薬学研究科の小比賀聡教授の3名が講演し、続いて「創薬支援のための技術開発研究」をテーマに、蛋白質研究所の高木淳一教授、工学研究科の森勇介教授、薬学研究科の堤康史薬学研究科長、水口裕之教授の4名から講演がありました。

最後に、土井健史第六部門長からアカデミアでの創薬を組織としてどう取り組むのかについて紹介があり、創薬をキーに様々な研究科が取り組んでいる大阪大学の多様性と可能性が語られました。



熱気あふれる会場



ポスター発表会場で説明を受ける平野俊夫総長



内閣府・西村康稔副大臣による来賓挨拶



平野俊夫総長による開会挨拶



河田教授による講演



児玉部門長による講演



アステラス製薬株式会社・野木森雅都会長による来賓挨拶



金田研究科長による特別講演

# 震災シンポジウム 学生協賛企画 学生ボランティアたちの福島への想い

## 「福島を感じて考えるスタディーツアー」 スタ☆ふく

『スタ☆ふく』は、『スタディーツアー福島』の略で、メディアを通じてではなく、参加者自身の目で福島の“今”を感じてもらうことを狙って2012年4月からスタート。

地元の旅行会社などの協力を得て参加者を募り、1回のツアーで20～35名が参加する。構成は大学生から50代の社会人まで幅広く、その7割が県外からという。これまでにツアーを6回開催。会津地方の観光地として有名な喜多方市は、年間7000人訪れていた観光客が震災後は0人にまで落ち込んだ。ツアー参加者は実際に観光しながら風評被害に立ち向かうNPOの方々に密着し、福島の観光地の“いま”を感じた。また、農業で有名な二本松市では、ツアー参加者が農業体験を通じて「福島の野菜は大丈夫なの?」という漠然とした疑問に農家と直接向き合った。



スタ☆ふくプロジェクトの福島大3年遠藤はるひさん(写真右、左は平野俊夫総長)は「東京、大阪、四国等から何度も来てくださる方も居て、ツアー後に福島の“今”を語る情報発信の起点になってくれるのが嬉しいですね」と、充実の表情を見せてくれた。

## 「大阪に居ながらできる支援を」 3.11 関西学生ネット阪大

2011年震災後早くから阪大の学部を越えた有志のメンバーでスタート。

現在行っている活動は大きく2種類。福島の原発問題について、原発作業員や現地に住まわれている方に話を聞くなどのフィールドワークを行うチームと、大槌町の人たちと交流するプロジェクトを進めるチームがある。

阪大4年の遊佐教継さんらが行う『希望のひとり』プロジェクトは、「大槌町のお母さんたち」と名産の手芸品をつくる。デザインは学生が行い、お母さんたちが縫いあげる。出来上がったものは、いちょう祭やまちかね祭、阪大近隣の市のフリーマーケットなどのイベントで販売し、利益はお母さんたちに返す。震災後バラバラになっていた町の女性たちが集まり、取り組むことで、やりがいを感じてもらったり、コミュニティの再生へつなげることが狙いだ。

震災当初多かった瓦礫を撤去するなどのボランティアは、街づくりとともに徐々に必要性が薄まり、ニーズが変わってきた。大槌町の方々と話をしたのがきっかけだった。遊佐さんは「まずは、現地の皆さんが何を求めているかニーズを受け止めることから始めることにしました。大阪に居ながらできる支援を模索していきたいですね」と優しく遅く語ってくれた。



大槌町のお母さんたちと

## 「大学、そして福島県を元気にしたい」 福島大学災害ボランティアセンター（学生団体）

2011年3月、30人ほどの福島大生から始まった災害ボランティアセンター。現在は330人まで増え、仮設住宅での傾聴活動、被災者向け10円バザーの開催、子どもを県内で遊ばせたくないという親御さんの声を受けて、子ども達を遠く離れた海まで連れて行き遊ばせるなど、多様な活動を行っている。

福島大2年の三浦恒彦さんは北海道出身。ピアノを学ぶため音大に行くつもりだったが、震災を経験したことで、県外にいる自分と被災者との間に温度差を感じ、音楽を使って何かしたいと福島大へ。当初、ピアノの特技を生かして仮設住宅でコンサートを開くなどしたが、一方的な押し付けにしかならないと感じ、先ずは聴くところから始めようと傾聴活動に力を注いだ。被災者の本音を書いてもらうための「つぶやきカード」には、『孫が残っているので心配だ』、『帰りたいけど帰れない』、『もう帰れなくてもいい』など普段からは見えない被災者の苦悩が綴られていた。



現在、三浦さんはこうした色々な想いを抱えて生活していることを県外の人たちや、時間を越えて後世にも伝えるべく曲を作成中だ。タイトルは「想い」。実際の声を曲として残せるのは自分にしかできないと、真っ直ぐに語ってくれた。

## 「つながる力」はスゴイ！ ツナボラ

ツナボラは「つながるボランティア」の略。代表の阪大博士前期課程1年の大門大朗さんは、頑張る学生をサポートしたい、とボランティアセンターの役割を担う組織としてツナボラをスタート。

実は、阪大には、環境ボランティアなど社会的な活動を行うサークルや団体が約40もある。しかし、こうしたサークルは比較的歴史が浅くネットワークが希薄だった。そこで、大門さんは、自分たちがハブになって、これらの団体が一堂に会するイベントを開くことを決意。それが昨年からはまった“Social Life”という社会系サークルが集まった新入生向け合同説明会だ。

いきなり一大イベントを呼びかけても参加は望めないため、自分たちと他のサークルがつながることから始めた。先ず、ボランティア活動の報告会を企画し、阪大の社会系サークルの中でも規模の大きい2団体を含むいくつかの団体に声をかけた。「ここが行くなら行こうかという空気を作りたかった」と大門さん。そして、約10団体からイベント参加の確約を取り付けたうえで、社会系サークル全体にイベント開催の告知を行った。結果は、予想を上回る25の団体が参加。2回目となる2014年度は31の団体が参加するという。

ツナボラの活動理念は「みんなで たのしく つながる」だそうだ。つながることで生まれるパワー、それを生み出す学生たちに期待したい。



イベント運営サポートの様子

## 兵庫県教育委員会と連携協定を締結しました

2月15日(土)、大阪大学会館で兵庫県スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 指定校による「課題研究合同発表会」を開催しました。この取り組みは、1月21日(火)、大阪大学と兵庫県教育委員会が、大学と高等学校における教育の質のさらなる向上を目指して、両者の連携・協力関係の基盤となる包括協定を締結したことにより実現しました。今回の協定締結をきっかけに、兵庫県下の優秀な高校生が、本学をより身近に感じる機会が持てるよう、今後更なる連携を進めていくこととしています。



高校生による研究発表

## 大阪大学、edX に参入

### MOOC として大阪大学の教育コンテンツを全世界に配信

大阪大学は、edXコンソーシアムと配信に関する協定書を締結し、edXプラットフォームからの教育コンテンツの配信を行うこととしました。MOOCとして、大阪大学の特色ある教育コンテンツを全世界に向けて配信していきます。

edXは、マサチューセッツ工科大学とハーバード大学が共同で設立したMOOC配信の非営利コンソーシアムで、世界から32の著名な大学が設立大学として参加しています。

大阪大学はMOOC配信を通じて、グローバル社会における、学問を介した「調和ある多様性の創造」への貢献を目指します。



大阪大学のedXページ  
<https://www.edx.org/school/osakaux>

## 外国人留学生修了パーティを開催

3月17日(月)、外国人留学生修了パーティを千里阪急ホテルで開催しました。

このパーティは、平成26年3月に本学を修了(卒業)予定の外国人留学生とその家族を平野俊夫総長が招待し、お祝いと懇談の場とするもので、毎年開催しています。当日は、本学教職員をはじめ、修了者のホストファミリーやボランティア、家主の方々も含めて約240名が参加し、参加者は写真撮影や団らんを楽しむなど、終始和やかなひとときを過ごしていました。

また、参加した留学生からは、「阪大の学生はフレンドリーだった」「留学生相談室がとても親切で安心して学生生活を送ることができた」「博士後期課程に進学しても頑張りたい」などの声が聞かれました。



修了者と記念撮影

### 理事

平成26年1月30日	尾山眞之助	退任
平成26年2月1日	大木高仁(人事労務戦略、多様な人材活用、事務改革担当)	

### 監事(非常勤)

平成26年3月31日	山崎優	退任
平成26年4月1日	内藤欣也	

### 副学長

平成26年3月31日	阿部顕三	退任
	江口太郎	退任
	吉川秀樹	退任
平成26年4月1日	星野俊也(国際公共政策研究科教授)	海外拠点、国際問題担当
	永田靖(文学研究科教授)	地域交流担当
	金倉謙(医学部附属病院長)	病院運営担当
	下田正(理学研究科教授・全学教育推進機構長)	教育担当

### 新総長補佐

平成26年4月1日	岩谷良則(医学系研究科教授・学生生活委員会委員長)	学生問題担当
-----------	---------------------------	--------

### 新理事補佐

平成26年4月1日	沖田知子(言語文化研究科教授)	国際戦略担当
	近藤勝義(接合科学研究所教授)	産学連携担当
	進藤修一(言語文化研究科教授)	教育担当
	野口眞三郎(医学系研究科教授)	人事労務担当
	深瀬浩一(理学研究科教授)	教育担当
	村上伸也(歯学研究科教授)	企画・評価担当
	山本達司(経済学研究科教授)	財務担当

### 新部局長

平成26年4月1日	文学研究科長・文学部長	和田章男
	人間科学研究科長・人間科学部長	中道正之
	言語文化研究科長	我田広之
	国際公共政策研究科長	村上正直
	生命機能研究科長	仲野徹
	高等司法研究科長	三阪佳弘
	医学部附属病院長	金倉謙
	歯学部附属病院長	前田芳信
	蛋白質研究所長	中村春木
	科学機器リノベーション・工作支援センター長	田中敏宏
	超高压電子顕微鏡センター長	保田英洋
	ラジオアイソトープ総合センター長	藤堂剛
	国際教育交流センター長	有川友子
	太陽エネルギー化学研究センター長	戸部義人
	グローバルコラボレーションセンター長	平田收正
全学教育推進機構長	下田正	
21世紀懐徳堂学主	永田靖	
適塾記念センター長	永田靖	